

きさに腫瘍の成長が押えられた。対象群の生存率は60%であったが、MMCカプセル投与群では生存率98%を示した。MMCカプセル投与群のマクロ組織所見では広範囲の壊死が腫瘍の中心に認められた。この実験においても白血球減少症のような血液像の障害は認められなかった。

3) 結論：改カプセルは癌領域にあわせて形状大きさが変えられ、従来の各種進行性癌の治療および延命効果が十分期待できる。

3. 肥大型閉塞性心筋症と思われる心病変を合併した多発性骨髄腫の1例

(内科1)

○寺田 一行・水谷 良子・清水 智江・
高橋 正知・山田 修・泉二登志子・
倉根 理一・溝口 秀昭

(循環器内科) 中村 憲司

63歳女性、昭和53年8月脊部痛、前胸部痛を訴え某病院受診し、心不全を指摘され入院となった。多発性骨髄腫(M.M)による肋骨、胸骨の骨折を指摘され、治療が開始されたが心不全症状改善せず、当科転院となった。入院時の所見として、聴診上、第4肋間胸骨左縁にL II度の駆出性雑音を聴取、尿蛋白陽性、血沈亢進、血清 γ グロブリンの上昇、M成分出現、免疫電気泳動にてIgG K型M蛋白がみられ、骨髄穿刺にて骨髄細胞18.3% Vが認められ、多発性骨髄腫と診断された。心電図ではII, III avFにおいてST低下、T波逆転、 $V_4 \sim V_6$ でST低下がみられ、心エコーにて肥大型閉塞性心筋症(HOCM)と診断された。直腸生検ではアミロイドの沈着は認められなかった。MMにアミロイドの心病変を合併することは多数報告があるが、本例はHOCM様の心病変を合併した例である。アミロイドの心病変とHOCMの鑑別およびMMとHOCMの両者の関連を文献的に若干の考察を加えて報告した。

4. ^{133}Xe による末梢神経の血行動態に関する知見

(整形外科)

○飯田 裕・大久保夫美子・白須 敬夫

末梢神経の血行が機能維持に重要であることは一般に認められているが、いわゆる mesoneurium を介して、外から入ってくる extrinsic vessels の役割については一致した見解がえられていない。しかしその重要性を肯定する見解も、否定する見解も、その根拠は色素を注入した光顕所見からの判断によるものである。われわれは今回 ^{133}Xe により末梢神経の血行動態を分析し、いささかの

知見をえたので報告する。

われわれはウサギの総腓骨神経に ^{133}Xe をトレーサーとして注入し、膝窩動脈からの extrinsic vessels を結紮することによつて血行がどう影響されるかを height orer area analysis により検討した。その結果 ^{133}Xe の時間放射能曲線は、経時的に減衰し、log scale では直線となることを認めた。また extrinsic vessels の結紮により血行は明らかに低下することを認めた。これは「色素注入法により神経内血流は extrinsic vessels の結紮によりほとんど影響されない」とする Lundborg の説とは異なるものである。今回われわれの行つた方法は、末梢神経の血行動態を把握するのに有用な方法と思われる。

5. 腰椎椎管内小異常陰影と椎間板障害との関連について

(整形外科)

○神保真理子・上方 浩美・田川 宏

腰痛を主訴として来院した患者ならびに、ドック患者の腰椎X線像で腰椎椎管内にみられた小異常陰影25例について、坂本らがこれを、1) posterior opophysis, 2) spondylatic spur, 3) 後縦靭帯石灰化症の3型に分類した。今回われわれは、Posterior apophysis の3例を追加報告する。

全例腰痛を主訴とし、X線像に posterior apophysis を認め、同時に全例、同部位の椎間狭小化を認めている。1例に myelography を施行し明らかなヘルニア圧排像を得た。このことから、症状を呈して来院した患者は、posterior apophysis のみならず、何らかの椎間板病変を合併しており、posterior apophysis のみで症状を呈したとは考えにくいと思われる。この点に関し更に症例を重ねて、検討したいと思う。

6. 各種 Syndrome の口腔領域の再検討

(2) Oculodento-Osseous Syndrome の1症例

(口腔外科)

○釣谷 経子・本田 祐一・
落合 武・河西 一秀

Oculodento-Osseous Syndrome は眼、指趾、鼻翼等において特徴的顔貌を有する非常に稀な奇形症候群であり、口腔領域においてもいくつかの臨床像を合併するとされている。

今回われわれは、本疾患についてすでに知られている口腔症状の再検討をセファロ分析により精査する機会を得たので報告する。患者は7歳男児、母親正常分娩、生下時体重3,100g、哺乳時頻回の嘔吐あり、体重の増加が